

セロトニン症候群

英語名 : Serotonin Syndrome/ Serotonin Toxicity

A . 患者の皆様へ



ここでご紹介している副作用は、まれなもので、必ず起こるというものではありません。ただ、副作用は気づかずに放置していると重くなり健康に影響を及ぼすことがあるので、早めに「気づいて」対処することが大切です。そこで、より安全な治療を行う上でも、本マニュアルを参考に、患者さんご自身、またはご家族に副作用の黄色信号として「副作用の初期症状」があることを知っていただき、気づいたら医師あるいは薬剤師に連絡してください。

精神科のお薬(特に抗うつ薬)などを服用中に、不安、発熱、震えや体がぴくぴく動くなどをおこす「セロトニン症候群」が生じることがあります。何かのお薬を服用していて、次のような症状が同時に複数見られた場合は、医師、薬剤師に連絡し、すみやかに受診してください。

「不安になる」、「混乱する」、「いらいらする」

上記の症状に加えて以下の症状がみられる場合。

「興奮する」、「動き回る」、「体がぴくぴく動く」、「震える」、「体が固くなる」、「汗をかく」、「熱がでる」、「下痢になる」、「脈が速くなる」など

1．セロトニン症候群とは

セロトニン症候群は、抗うつ薬をはじめとした、セロトニンに関係する作用をもつ薬を服用中に出現する副作用で、精神症状（不安になる、混乱する、いらいらする、興奮する、動き回るなど）、神経・筋症状（手足が勝手にぴくぴく動く、震える、体が固くなるなど）、自律神経症状（汗をかく、熱がでる、下痢になる、脈が速くなるなど）が見られることがあります。

セロトニン症候群は、服薬後数時間以内に症状が表れることが多くあります。服薬を中止すれば、通常は24時間以内に症状は消えますが、ごくまれに40以上の高熱が続き、横紋筋融解症や腎不全、播種性血管内凝固症候群（DIC）などの重篤な合併症を認め、命にかかわることもありますから注意が必要です。

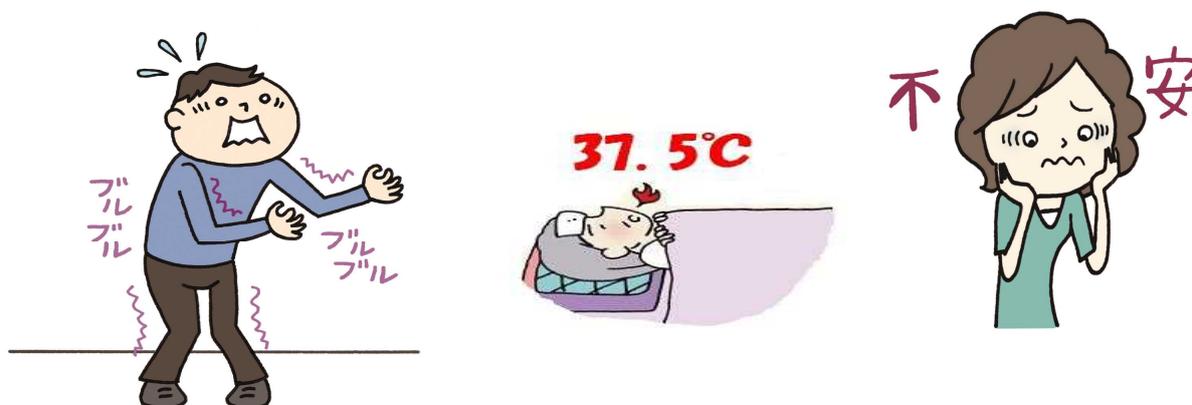
2．早期発見と早期対応のポイント

セロトニンに関係する作用をもつ薬の飲み始めや増量後に、急に精神的に落ち着かなくなったり、体がぴくぴく動いたり、汗が出てきて脈が早くなるなどの症状が見られた場合は、副作用を疑うことが必要です。

セロトニン症候群の原因薬剤は抗うつ薬が最も多く、特に一般にSSRIと呼ばれる選択的セロトニン再取り込み阻害薬（フルボキサミン、パロキセチン、セルトラリン、エスシタロプラム）で起きることがほとんどです。他にはパーキンソン病に用いられるセレギニンという薬で起きることもあります。まれではありますが、炭酸リチウムなどの気分安定薬や抗不安薬、麻薬性鎮痛薬、片頭痛治療薬、また、サプリメントであるセントジョーンズ・ワート（西洋オトギリソウ）で起きる可能性もあります。特に抗うつ薬を複数併用している人、他の薬と同時に服用している人に起きやすいので注意が必

要です。

セロトニン症候群が疑われた時は、速やかに医師か薬剤師に連絡して指示に従ってください。もし連絡が見つからない場合は、お薬手帳やお手持ちの薬を持参して救急医療機関を受診してください。意識がもうろうとしてきた時は救急車を呼んでください。セロトニン症候群の場合は通常服薬を中止し、安静にすればすみやかに軽快しますが、もしそうで無かった場合は、薬を急にやめることがかえって危険なこともありますので、必ず医師・薬剤師にご相談ください。



医薬品の販売名、添付文書の内容等を知りたい時は、このホームページにリンクしている独立行政法人医薬品医療機器総合機構の「医療用医薬品 情報検索」から確認することができます。

<https://www.pmda.go.jp/PmdaSearch/iyakuSearch/>

独立行政法人医薬品医療機器総合機構法に基づく公的制度として、医薬品を適正に使用したにもかかわらず発生した副作用により入院治療が必要な程度の疾病等の健康被害について、医療費、医療手当、障害年金、遺族年金などの救済給付が行われる医薬品副作用被害救済制度があります。

(お問い合わせ先)

独立行政法人 医薬品医療機器総合機構 救済制度相談窓口

https://www.pmda.go.jp/kenkouhigai_camp/index.html

電話：0120 - 149 - 931 (フリーダイヤル) [月～金] 9時～17時 (祝日・年末年始を除く)